



## アメリカンコミックのヒーロー大集合

これまで単発の映画作品として活躍してきた、アメリカンコミックのヒーローたち。大富豪で天才発明家のアイアンマン、神々の国から地球へと追放された雷神マイティソー、感情の爆発によって容姿を激変させる科学者・超人ハルク、第2次世界大戦の超人兵士で70年間の眠りから覚めた伝説の戦士キャプテン・アメリカ、女スパイのブラック・ウィドウ、エリートエージェントで弓の達人ホークアイの6人。このヒーローたちをひとつに総動員したのがこの映画。パワーも能力も並みはずれた特殊な戦闘力を持つこのヒーローたちによって編成されたチームが「アベンジャーズ」。日本でいえば、仮面ライダーとキン肉マン、ゴレンジャー、エイトマン、月光仮面などが集結して宇宙からの悪と対決するというパターンでしょうか。

## 「アベンジャーズ」

長官ニック・フューリー率いる国際平和維持組織シールドの基地で、世界を破壊する力を持つ四次元キューブの極秘研究が行われていました。しかし突然、制御不能に陥ったキューブが別世界への扉を開いてしまします。そこから現れたのは、神々の国アスガルドを追放され、地球支配を目論む邪神のロキ。その野心を知ったフューリーは、最強ヒーローたちによる「アベンジャーズ」結成。マンハッタン上空に次々と姿を現す地球外の軍団。地球滅亡の危機を回避するために大暴れのアベンジャーズ。最先端VFXを駆使した圧倒的なスピードとビジュアルな動きがスクリーンいっぱいに繰り広げられます。これだけのヒーローを集めると個々の活躍も差がでてきそうですが、そこは各ヒーローの活躍時間配分はほぼ均等になっています。

## 16mmフィルムが



復元された上掛け式の直径6メートルの水車



辻子谷水車郷の前で左から徳畑勇さん・東中淑さん・北口隆さん

辻子谷水車郷に案内してくれたのは、「枚岡の自然と文化を大事にする懇話会」事務局の徳畑勇さん。そして、「寛永年間から東大阪生駒山麓には、7つの谷がある落差に恵まれた溪谷があり、117の水車がまわる地域だった」と、この辻子谷の歴史を語る北口隆さんは「昭楠会」のメンバーの一人です。

人たちが「水車を復活させたい」と、「昭楠会」を立ち上げたのです。30歳すぎまで現役の水車の修理をしてきた東中工務店の東中淑さんが水車を試行錯誤で再建。辻子谷に堂々とした水車が復活しました。この地で昔から大事にされてきたものを次世代に残して、住みよまちづくりをめざす「枚岡の自然と文化を大事にする懇話会」は、「昭楠会」や古民家の再生に携わっている輝建設の「石切ビレッジ」とも連携して、枚岡のまちづくりを考えるネットワークをつくらうと活動を広げています。

## うちの近所 コレイチ

わが町 自慢紹介 12



枚岡の自然と文化を次世代に伝えたい!

## Culture Navi かるチャナび

## 平和の種まく人 九条の花を咲かせよう

池田 和幸さん (豊中教職員組合 書記)

9月15日の「21回平和のための豊中戦争展」に向け、事務局として準備をしてきた池田さん。鹿児島で育ち、勉強が大好きでまじめ一筋の少年でした。しかし、中学校2年の国語の授業で「君が代」の天皇賛美の歌詞に疑問を持ち、「戦争責任は、天皇



「二度と戦争は起こさないという思いを持ってもらうためにも、戦争の悲惨さを訴えていきたい」という池田さんと戦争展でのパネル

にもあるはずではないか」と考えて、哲学や政治に興味を持ち始めました。

その後教員となり、教職員組合の執行委員長などを歴任して、昨年度末定年退職。現役の教職員の仕事や組合活動の過酷さを知っているからこそ、退職後は書記という役目と、この戦争展にもかかわっています。12団体で取り組んでいる戦争展に向け、豊中の空襲で亡くなった方の写真や資料を整理。今回はオスプレイ問題や放射能の被爆問題なども取り上げています。「戦争展は一度やめれば、再開することは困難になるので絶対続けていく」という信念で取り組んでいる池田さんです。

戦争に協力する人間にだけはなりたくない!

たしなみの武辺は生まれながらの武辺に勝れり

織田 信長

鍛えてきた能力は、生まれもった能力より優れているという意味です。エジソンの「天才は1%のひらめきと99%の努力からなる」と同じ意味の言葉を、我が国の「戦いの天才」が語っています。凡人は「天才とはもともと才能が違う」と感じて、努力をあきらめてしまいがちですが、天才とはそんなことを考えず、ただひたすら努力する人なのかもしれません。

いまも心に響く名詩・名歌・名語録

あかあかと日は難面(つれなく)もあきの風

松尾 芭蕉

秋のはじめの頃はやたらと暑いものです。秋の夕日がおかまいなしに照りつけます。旅人は顔があつてたまりません。あかあかと夕日が照りつける中、時折吹くかぜはひんやりとして秋の気配を感じさせます。芭蕉は7月(旧暦)のはじめに金沢でこの句を詠んだのです。